

ドクターインタビュー

扇町公園皮膚科クリニック 院長 戸田 憲一 先生

大阪市営地下鉄（谷町線）中崎町駅から徒歩5分。北野病院の近くメディカルモール内にある、扇町公園皮膚科クリニックは2017年5月に開院されました。地域医療に密着し、一般的な皮膚疾患からアトピー性皮膚炎や乾癬などの専門的治療まで対応されている院長の戸田先生にお話を伺いました。

—— 先生が医師或いは、皮膚科医を目指されたきっかけなどお聞かせください。

私はもともと数学や物理が好きだったので工学部に進学したのですが、就職を考えたとき思うところがあって医学部に入り直しました。皮膚科を選択したのは研究的なことに興味があったので、患者さんを診ながら研究もできるという科目を考えると合っているのではないかなと思ったからです。また、皮膚科は多くの病気があり解明されていないものも多く、アトピー性皮膚炎や尋常性乾癬なども研究はされていますが、未だに原因が分かっていないのが現状です。そういう意味でも、臨床をしながら研究することにモチベーションが上がり、やりがいも持てるなと思いました。

—— クリニックの特徴や治療方針などお聞かせください。

当院では保険診療を軸に、一般的な皮膚疾患はすべて受け入れるというのが基本姿勢です。重症の場合は、患者さんの希望や他科の連携などをふまえて提携病院を紹介しています。そして、すべての皮膚疾患に対し、日本皮膚科学会が勧めているガイドラインに沿った、あるいは世界水準に沿った治療をしたいと考えています。ガイドラインを中心とした治療にも外用薬や内服薬などいろんな治療法があり、症状によってどう行かせるかは医師の裁量に任せられます。標準治療に準拠しながらも、患者さんと話し合いながら、個々の症状や生活環境に応じた患者さんが満足できる治療の提供を目指しています。

具体的には、まず患者さんの話をよく聞きます。話を聞いてくれない先生に疑問を持たれて当院に来た患者さんも少なくありません。そして、ガイドラインについて説明し、症状に対してどうやって治療していきましょうと提案し納得されれば進めますが、患者さんが疑問をもつようなら納得して取り組める治療の提案をします。

また、当院は私と2人の女性ドクターの3人で診療を行っているので、プライベートパーツの診察や相談内容によって、患者さんにとっても選択肢があつていいかなと思っています。このように3人の皮膚科医が一緒にやっている診療体制の皮膚科はあまりないと思います。

—— 最近の皮膚・アレルギー疾患の診療で、感じておられることなどございますか？

最近アトピー性皮膚炎や乾癬も年齢を問わず増えていると感じますね。統計的にも同じことが言えると思います。

特に乾癬はあるモデルさんがSNSで告白したことにより、「自分もそうではないか」と症状に気がついたという患者さんが多いです。乾癬が増えている原因としては、乾癬は慢性炎症、炎症性の臓器異常の一つと言われているとリウマチと関係していたり、あるいは、心筋梗塞などが関係しているなどいろんな説があります。全身の炎症性疾患の皮膚でのあらわれとして乾癬を理解しようとすると、サイトカイン(免疫に関与するたんぱく質)で全身の炎症と関係があるものが、乾癬でも関係があると考えられています。日本で増えている理由は、はっきりとは分かりませんが、欧米では発症率が10倍くらいある病気ですから、欧米型に生活が近づいてくることによって乾癬が増えてきたのではないかなという推測はされています。

—— 難治性皮膚疾患に対して、光線治療を取り入れられておられますが、治療について詳しく教えて頂けますか。

光線治療は病変に紫外線を照射する治療方法で、皮膚の細胞増殖や炎症を抑える働きのある、UVA(長波長)とUVB(中波長)が用いられます。現在では、アトピー性皮膚炎や乾癬などの皮膚疾患に対して広く行われています。当院ではUVBを使用する「ナローバンド」「エキシマライト」を使用しています。主にアトピー素因を機にした円形脱毛症、尋常性乾癬、アトピー性皮膚炎の治療に使用しています。



戸田 憲一 先生 プロフィール

扇町公園皮膚科クリニック 院長

【経歴】

昭和55年3月 京都大学医学部卒業
 昭和55年6月 京都大学医学部皮膚科教室入局(研修医)
 昭和57年11月 京都大学医学部付属病院皮膚科助手
 昭和60年9月 米国テキサス大学留学
 平成5年11月 京都大学医学部皮膚科講師
 平成7年3月 京都大学附属病院皮膚科外来医長
 平成8年4月 京都大学附属病院皮膚科病棟医長
 平成11年4月 京都大学附属病院皮膚科外来医長・医局長
 平成13年4月 公益財団法人/田附興風会/医学研究所
 北野病院 皮膚科主任部長
 平成29年5月 医療法人誠仁会 扇町公園皮膚科クリニック
 開院

【資格】

日本皮膚科学会認定皮膚科専門医

【所属学会】

日本皮膚科学会

【専門】

皮膚創傷治療・乾癬・血管新生・皮膚科学

アトピー性皮膚炎の場合、薬を飲みたくないという患者さんあるいは妊娠している方で、症状が酷くなったときに紫外線治療でよくなっている人もいます。ただ週1回から2回の通院が必要になるのでなかなか難しいケースも多いです。また、直ぐに効果を感じるのには難しく、少数回ではなくやはりワンセット20回前後行わないと効果が見えにくい治療でもあります。一般的には、保湿、かゆみ止めの内服、ステロイド外用薬の三本柱で治療する方がお勧めです。これで効果が上がらない場合に、もう一段階上の治療として光線治療を行い内服療法を併用することもあります。また、光線治療の効果として、薬を塗るストレスが軽減されることがあります。アトピーの人は保湿して、薬も塗らないといけなくて、とてもストレスなんですよ。一番良いのは、外用薬を塗らなくてよく、内服はもちろんそうですけど、全身療法で副作用が少なくうまくいくのがいい。例えば、風呂に入っているときについて保湿ができるのかな。まだそこまで進んでいませんが、将来的に全身的な治療でうまくいく方法が完成すればいいと思っています。

—— 患者さんや、保護者の方にアドバイスをお願いします。

ひとつは、専門的な知識を持ち経験も豊富な、信頼のおける医者を見つけることが大切です。その医者が見つかったら、「QOL」と言えはいいのでしょうか、自分がどういう生活をしたいかということ正直に話して、先生と一緒にそれに極力近づけるような治療に取り組むことが望ましいと思います。悪くなると不安になって違う医療機関を受診したくなりますが、いいときも悪い時も信頼のおける医者のところにきちんと通って、肌の状態を診てもらいながらやっていくことが大事だと思いますね。

—— 先生のストレス解消法などお聞かせください。

映画が好きなので映画鑑賞をしたり、音楽を聞きに行ったりなど、休日にゆったりとした時間を過ごすことですね。

—— 本日は、貴重なお話ありがとうございました。

(文責 三原 ナミ)